

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 22 年度派遣報告書

—インド・発展社会研究所, チベット語, H22. 8. 23-H23. 1. 11—

平成 22 年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 1 回生

長岡 慶

自身の研究テーマについて

南アジア各地に広がり多様化したチベット医学が、チベットと状況の異なる社会で、どのように受け入れられ展開しているのかを民族誌的記述から明らかにすることを旨とする。

近年の研究は、現代社会との関係に注目し、チベット医学の現代性（モダニティ）を解き明かそうとしてきた。そこでは、政府の政策と関連した制度化やトランスナショナルな拡散による、多様な実践の喪失という展開が描かれてきた。モダニティ研究は、チベット医学を固定的な単一のものではなく、それぞれの地域における社会や政治、経済、アイデンティティの動態として多面的にとらえる必要があると主張する。しかし、実際に地域社会の文脈に沿ってチベット医学をとらえなおした研究はまだ少なく、数少ない研究はどれも上述した「多様性の喪失」という同様の結論を補強するにすぎない。また、歴史学などで研究されてきた医学教典は、重要な医療実践の根拠であるにもかかわらずモダニティ研究で触れられることはなく、重要な視点が抜け落ちている可能性がある。そこで、本研究は、チベットとは異なる社会であり、医学教典に記述が見られる、インド北東部のモンパ族が暮らす地域（タウン周辺）を調査地とする。インド・チベット・ブータンの境界領域にあり、古くからチベットと交易関係にあったモンパ社会において、チベット医学がどのような文脈の中で位置づけられ、展開してきたのかを民族誌的記述を通して研究していく。



写真 1 モンパの女性を診察する
チベット医（タウン）



写真 2 チョルテン（仏塔）の記念式典（タウン）

研修言語の概要

チベット語の話されている地域はチベット高原とその周辺に分布し、チベット自治区のほか、東は中国四川省、雲南省、西はカシミール北東部、北は青海省、甘肅省、南はブータン、インドのシッキム州、ネパールにわたって用いられる。各方言間には差異があり、チベットの中心地であるラサ周辺のウー・ツァン方言がもっとも幅広く理解されている。しかし、書き言葉は1つに限られ、これがチベットの文字文化に統一性を与えている。

語学研修の内容について

語学研修の前半は、インド北西部のダラムサラで約3ヶ月半、チベット語の文法や読み書き、基礎的な会話を学習した。後半は、調査地である北東部アルナーチャル・プラデーシュ州へ移動し、約1ヵ月間、調査をしつつ、より実践的な会話能力の強化に努めた。



写真3 図書館での授業風景（ダラムサラ）



写真4 家庭教師のペマ先生（ダラムサラ）

前半は、チベット文献図書館で外国人向けの授業を受けた。基礎会話と文法の授業を1時間ずつ週5日、15人の生徒と共に学習した。調査地ではヒンディー語も話されるため、ヒンディー語の授業も受講した。授業の雰囲気はとてもフランクで質問しやすく、生徒同士、刺激し合って学習に励んだ。午後は、家庭教師のペマ先生の家で、週6日1時間、会話を重点的に学習した。文字の綴りを知らない内からアルファベット表記でチベット語の作文を書き添削していただいた。時には、作文から発展してダラムサラやチベットの風習や歴史へ話がおよび、楽しい授業のおかげで、話すということに熱心に取り組むことができた。その結果、チベット語を聞き取り話す力が格段に向上した。また、授業のない時間は、チベット人のレストランで手伝いをし、近くの尼僧院に行くなど、なるべくチベット語の環境に身を置いた。

後半は、僧院や孤児院に滞在し、寺の祭礼や診療所、農村などで調査をした。調査対象者である僧侶やチベット医と打ち解けて話すことができ、チベット語を介して現地語であるモンパ語も少し学習した。

研修期間中に印象に残った体験や経験

ダラムサラに来て間もない頃、ペマ先生から調査地タウン出身の知り合いを紹介された。彼女はチャンパという名の尼僧であった。「なぜタウンへ行きたいの？」と質問され、私は英語で答え、ペマ先生が通訳してくれた。「次は自分で行きなさい」と先生に言われ、私はチベット語がまともに話せないまま、彼女へ会いに行った。彼女と弟子が出かける場所に同行したものの、2人の会話がわからず黙っていると、彼女は何度も笑顔で話しかけてくれた。それから、たびたび尼僧院を訪れるようになり、最初は身振り手振りで必死に会話した。彼女は私が理解するまで繰り返し話し、やっと理解して私が「hako song (わかりました)」と言うと、本当に嬉しそうな顔をした。3か月が過ぎ、次第に普通に話せるようになっていった。ダラムサラを離れる前日、私は尼僧院へ出かけた。その日、いつも笑っていた彼女が初めて溢れる涙を拭いた。あの瞬間、胸が熱くなったのを覚えている。

目標の達成度や反省点について

チベット語で調査できるようになることが第一の目標であった。研修によって、日常生活上のことや研究に関して考えや疑問を伝え、相手の話を理解することがだいぶできるようになり、チベット語に対して自信がついた。反省点は、尊敬語と読解の学習が十分にできなかった点である。高僧と話す時などは尊敬語を使わないと失礼になるので英語を用いた。また、辞書をひけばチベット文字の読み書きができるが、まだ文献を読むまでには力が及んでいない。今後も精進して学習を続け、語彙を増やすことに努めたい。

調査時、ある僧が焚火のそばで輪廻について弟子にとうとうと語り始めた。私はその光景に感動し、耳をすまして聴いていたが、大まかな話しかつかむことができなかった。あの時彼らが熱く語り合っていたことを、次回行く時は「今ならわかる」と言えるようになっていたい。

ITP 事務局と先生方、現地でお会いした方々にこの場を借りてお礼申し上げます。